

# 窓について

松下尚路

久しぶりに訪れた湖西の街は、いつかの日の景色とよく似ていた。寝起きで働いていない頭のまま、母親に連れられて向かった、これから従兄弟夫婦が住むことになる新築一戸建ては、木材とコンクリートの組み合わせが特徴的な、落ち着いた色合いの家だった。どこまでも天井の高い、開放的なプレイルームも、読書家である従兄弟が蔵書を保管するために作ったという図書室も、どれもが素晴らしいものだった。

そのなかでも、それら全ての部屋に設置された窓が、僕には何よりも良いものに思えた。書斎にダイニングに寝室に天井と、至る所に取り付けられた窓は、それ自体は不可視のものでありながら、ある不思議な存在感を放ち、この家に確かな魅力を与えていた。

少し僕自身の話をしよう。かつて、家で大学の過去問を解くのを繰り返していた頃、ふとした瞬間に、体全体が重くなるような、そういった圧迫感を感じる事が何度かあった。大学に入って、一人暮らしをするようになってから、そのような圧迫や閉塞を感じることは、より多くなっていったように思う。それは家という、どうしてもその場に固定されざるを得ない物体が否応なく持つてしまう性質のように思われた。

空間がその場に固定されているということは、ある時はそこに住む人に安心感を与えるのだけれど、ふとした瞬間にそれは言いようもない息苦しさを与えるものに変化してしまう。だから人は、リビングで勉強するのをやめて自室に行ったり、図書館に行ったりして、そうした閉塞感から少しでも逃れようとするのだろう。

そういう経験をしてきたからこそ、この家に入ったとき、それまでになかった、ある不思議な感覚になったのを覚えている。この家には、上述したような、住む人を圧迫させるような閉塞感が極めて希薄だったのだ。それは、極めて開放的な家だった。

この家が持つ不思議な開放感、それを支えているのはきっと、効果的に取り付けられた2つの窓に依るところが大きい。

一つ目の窓は、家の内部と外部を繋ぐものとしての窓である。それは、プレイルームに取り付けられた大きな窓であり、各部屋に何気なく存在している窓であり、最上階に設置された天窓に象徴される。これらの、内部と外部を繋ぐ窓が担っている役割は、太陽の光というものを如何にして家の内部に取り込むか、という問いに集約される。

この問いに対して、この家の窓たちは、極めて効果的に機能している。実際、寝室脇にある窓からは昇ってくる朝日を観測することができるし、午後は天窓が部屋全体を柔らかな光で照らし出している。最上階に西向きに設置された窓からは、沈みゆく夕陽と、それに照らされる街並みをいつまでも眺めることができる。そしてプレイルームの大窓は、そのような朝-昼-夕という時間の流れを全て観測できる位置に設置されている。ここにこそ、外部と内部を繋ぐ窓としての効果がある。つまり、空間的な位相に存在している家に、時間的な位相

を導入する効果である。そしてそれは、そこに住む僕ら自身が、空間的な感覚だけでなく時間的な感覚を獲得するということでもある。さらに言えば、家という空間に時間的な位相を導入することこそが、一人で部屋にいるときの、方向感覚の消失とでもいうべき不安と閉塞感に抗する一つの在り方であるのだと思う。

家の中に時間を取り入れるものとしての外部と内部を繋ぐ窓については今述べたような通りである。では、ここで僕は、二つ目の、内部と内部を繋ぐあの窓について話を移そうと思う。

二つ目の窓は、寝室の片隅に、プレイルームを見下ろすことができるような形で設置された、家の内部と内部を繋ぐ窓である。「ジュリエットのバルコニー」をモチーフに作られたという、室内に作られた窓は、では、一体どのような役割を担わされているのだろうか？

それは、一言で言ってしまうえば、家という空間において、そこに住む人同士をいかに繋ぐかという問題にかかっている。一人で部屋に長時間居るとき、あの圧迫感と同時に、どうしようもない寂しさがやって来ることがある。そして僕らは、その淋しさに耐えることができない。しかし、だからといって、四六時中誰かと一緒に部屋で過ごすというのも、それはそれで窮屈で耐え難いものであるに違いない。ある空間を一つの単位として区切る家という建造物と、その家をいくつかの役割に応じて区切ることによって生じる部屋という空間が否応なく持ってしまう、一人で居るには寂しすぎるし、誰かといるには窮屈に過ぎるという事態を、どうにかして解消しようという苦悩の一つの成果が、この「ジュリエットのバルコニー」をモチーフとした、家の内部と内部を繋ぐ窓であったと言えるだろう。

「ジュリエットのバルコニー」を模したこの窓は、普段は閉じられている。だから、プレイルームでは何の視線も気にせず遊ぶ事が出来るし、寝室においてもまた、誰にも邪魔されずに眠りに就く事が出来るだろう。また、寝室には小さな勉強机が置いてあるため、そこで勉強をするのも悪くないだろう。そして、もしそのような閉じられた空間が窮屈になったなら、窓を開ければいい。それによって、それまで閉じられた空間は、この窓によって、再び繋ぎ直され、視線と視線の交差が可能となる。

この、完全に開け放たれるわけでもなく、完全に閉じられるわけでもなく、部屋同士が微妙な繋がりの中にあり、その上確かな時間的な位相の中にある空間の持つ空気こそが、僕が最初にこの家に訪れた時の、あの不思議な感覚――家というものがどうしようもなく持ってしまう圧迫感や閉塞感と孤独感――極めて希薄に思えたあの感覚の正体であったのだと、ひとまずは言えるのだろう。

従兄弟はそれぞれの部屋を案内してくれる傍ら、「何かを作業するときに、違う場所でやりたい時ってあるでしょ。それを一つの家で完結させたかった。」と語っていて、そうした要望に対して、先に述べたような、内部と外部、そして内部と内部を繋ぐ役割を担った二つの窓は、一つの答えを提示していたように思えた。

各々の部屋は、内部と外部を繋ぐ窓によって、それぞれが独立した部屋として存在している。さらに、差し込む太陽の光によって、各々の部屋は、住むものを圧迫させる硬直した無

時間的な存在であることを辞め、それ自体が確かな時間的位相の中で動作を開始する。

また、区切られた部屋同士は、内部と内部を繋ぐ窓によって、それぞれが、何か1人での作業を行うのに適する独立した部屋でありながら、同時に、区切られた空間が持つあの孤独感からも解放されている。

こうした、効果的な窓の配置と差し込む光といった要素の集合によって、器官としての部屋とその集合としての家は、無生物的な冷たさから解き放たれ、一つの生き物として息をし始めるのだ。

僕がこの家を訪れたとき、この家にはまだ机や本棚といった、調度品の類が持ち込まれていなかった。それらが持ち込まれ、あるべき場所に配置されることで、この家はまた違う姿を見せてくれるだろう。それだけではない。年月が過ぎていく中で、それまで誰かの個人部屋だった部屋が、図書室に変わり、子供たちの遊び場だったところが、受験のための勉強部屋に変わる事だってあるだろう。人が過ぎていく時間の中で姿を変えるように、この家もまた時間とともに姿を変えていく。

来年、またこの家を訪れたとき、この家はあの頃からどんな歳の取り方をし、どんな風に姿を変えるのだろう。それは意味のない夢に過ぎない。ただ一つ明らかなのは、変化がどんな形を取るにせよ、それはきっと素晴らしいものになるに違いないということだけだ。